藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 57: 7-9, March 10, 2009

木村光子[1]・濱田　仁[2]：宗像大社の古式祭とアカモク

四方を海に囲まれた日本では，人々は古来魚介類とともに海藻を採集して生活を営んで来た。海藻は食料としてだけでなく，製塩（ホンダワラ類），薬（マクリ，ミルなど），洗い張りや漆喰の材料（フノリ類など），子供の遊び（フクロフノリ）などにも用いられ，その果たした役割は意外に大きい。また，海藻は万葉集などの古歌にも数多く詠まれ，日本文学上も重要である。一部の海藻（ワカメ，コンブ，ホンダワラ類など）は神事や祭に用いられ，新年の祝いや，お祓いにも使われた。この企画でも出雲地方について取り上げた（濱田 2007a，2007b，2008a）が，古い海藻産地や海藻の神事の調査は，古代日本人の生活や海藻に対する思いを再現するので，古代文化を理解し，その起源を探る上で貴重な手がかりとなる。

今回は，福岡北部の宗像大社を訪ね，約800年の伝統ある収穫祭の「古式祭」に参加し，「ゲバサモ」（ホンダワラ属のアカモクの事）が利用されているのを確認した。この神事を紹介し，「ゲバサモ」の神事での意味や語源について考えたい。

1. 海人族と宗像大社

玄界灘に臨む福岡県北部（図1）には，古来，海を生活手段とする海人が住んでいた。古事記や日本書紀，万葉集にも志賀や糸島の久米の海人などの名が見える。ムナカタ（胸形，後に宗像）はその中の一族で，胸に入れ墨をして海に潜ったといわれる。宗像大社に祀られる神の誕生については古事記（712年）（倉野 1958，次田 1977），日本書紀（720年）（坂本ら 1967）の他，宗像大社の伝承もあり，神名の漢字表記や神殿の場所など一部で異なるが，古事記ではほぼ次のようになる。

天照大神は，根の国（海の彼方の穀物や富の源泉の世界）へと赴く須佐之男命に邪心がない事を試す為に彼の剣を貰い受けて3段に折り，天之真名井で浄め，噛み砕いて口から吹き出すと，まず沖ノ島の奥津宮（沖津宮）に鎮座する多紀理毘賣命，次に天之真名井のある大島の中津宮（図2）に鎮座する市寸島比賣命，最後に宗像市田島の辺津宮（図3）に鎮座する多岐都比賣命の三女神が生まれ，大国主命6世の孫とされる胸形君が三女神を祀った。

図1　宗像大社関連地図

この様に，宗像大社は3個所の社殿から成り，辺津宮から北西へ4 km弱の神湊から船で北西へ約7 km沖の大島に中津宮，更に北西へ約50 km離れた沖ノ島に沖津宮があり，三社はほぼ一直線に並び，その先に朝鮮半島東南端の釜山がある（図1）。

沖ノ島は古来神聖な島とされて神職に守られ，現在でも女人禁制の島である。これまで3度の調査によって23箇所の祭祀跡が確認されたが，4世紀後半から10世紀にかけて大和朝廷が祭祀を行ったとされている。かつて遣隋使や遣唐使，百済や新羅への航路としてこの海域は重要で，精緻な金細工品や銅鏡，金銅製の馬具，子持ち勾玉，ガラス製装飾品やペルシャ製カットグラスなど，当時の一級品が沖ノ島から出土し，宗像大社の神宝館に展示されている。沖ノ島が海の正倉院とも呼ばれる所以である。

日本書紀には胸形君徳善の娘の尼子娘が，天武天皇の妃となり高市皇子を産んだとある（坂本ら 1967）。航海や漁労の技に長けた玄界灘の海人族の中で，宗像氏は大和朝廷との結びつきを深めて力を伸ばした。鎌倉時代の元寇の際には自ら戦って御家人となるなど，宗像社は歴史の波にもまれながらも地元の神として厚い信仰を受けて今日に至っている。

2. 古式祭

海の神を祀る宗像大社の祭りの中でも，「古式祭」は歴史のある特別な神事である。旧暦では11月15日であったが，現在は12月15日に近い日曜日の早朝5時半から神職に依る神事が拝殿で行われる。2008年は12月14日であった。その年の収穫物を神前に供え，神と共に食事を戴く御座は境内の清明殿であるが，午前6時から一番座が始まり，1号から50号までの50人が御座の新莚に着座して行われる。40分程すると二番座となり，次の50人が食事を共にする。こうして，三番座か四番座迄続く。その用意は，神社の氏子が食材を集めたり，料理を作ったり，栗の木で箸を作ったり，御座に参加する者から費用（千円）を徴収して（図4）順番に宮座証（図5）を渡すなど，分担する。中でも，神湊に近い江口の村人は，江口の濱で神饌（神様の食事）の「ゲバサモ」（図6，ホンダワラ属のアカモク）を採って来るが，毎年一番座で，神職の両隣の特別席に座る。古式祭において，如何に「ゲバサモ」が重要な意味を持つかが分かる。

神饌（図7）は神棚に近い奥に，米・塩・酒・野菜・果物などが供えられる。手前中央には，菱餅・九年母（ミカンの原種）を挿した竹串とウラジロを，藁で包んだ山芋に突き刺し，それを

図 2–10　宗像大社　2. 海から見た（筑前）大島にある宗像大社の中津宮。港を出入りする船には神社に手を合わせて拝む者が多い。　3. 宗像市田島にある宗像大社の辺津宮。　4. 古式祭参加者の受付風景。　5. 参加者に渡される宮座証。順番と座席が定まる。　6. 江口の濱で採集された「ゲバサモ」（アカモク）。　7. 神様に供えられた神饌。奥には通常の神饌が 5 つの三宝上に置かれ，手前には古式祭特有の「御菓子」が供えられ，その中央に「ゲバサモ」（アカモク）が盛られている。　8. 参会者の食事である御座（おざ）の食事。手前に栗の枝で作った箸がある。　9. 御座の光景。　10. 御座で出される「ゲバサモ」（アカモク）の料理（右）とご飯。

折敷（四角い台盤）の四隅に配し，それらを紐で結んで四角く囲い，中央に「ゲバサモ」を置いた，いわゆる「御菓子」が供えられる。

50人の参会者が着席すると，太鼓の響きと共に「御座」の神事が始まる。祝詞，木綿幣でのお祓い，茶碗の塩湯を振りかけるお清め，全員で古歌（千早振る第一の宮の木綿襷掛けての後は楽しかりけり）の唱和が第三まで続く。次いで神職による玉串奉納，宗像地方の各区長によるサカキの奉納の後，お神酒が注がれ，一同これを戴く。ここでお椀に汁が給仕され，折敷に添えられたクリの枝の箸（図8）を用いて会食となる。我々50人が一緒に食べる御座（図9）の食事（図8）は，稲穂を立てた山盛りのご飯，煮物（根菜類・揚げ豆腐・かまぼこ），味噌田楽（豆腐・ノシアワビ）の九年母添え，なます（根菜・いりこ），菓子（菱餅）が並び，あとから白酒，味噌汁（出昆布・豆腐・薄揚げ・大根・里芋），それに神職の方が「ゲバサモ」と大豆を煮て味噌で和えた料理（図10）を箸で一つまみづつお椀の脇に置いて行かれる。その味わいは，アカモクらしい粘りはないが，シャキッとした歯ごたえとほのかな磯の香りでまずまずの美味であった。アカモクと味噌は相性が良いようだ。

会食者には，あらかじめ弁当箱が配られ，余った食事を持ち帰る。参会できなかった人に分けるという意味であろう。食事が済むと〆の太鼓が打ち鳴らされ，「御座」は終了した。

神事の後，裏方を務めた氏子の方々と話をした。それによれば，この時期，江口の濱には必ず「ゲバサモ」が打ち寄せられ，採れなかった年はないそうだ。しかし近年，ホンダワラ類はどれも少なくなり，特に「ゲバサモ」は少なくなっているそうで，将来心配である。実際，帰りに江口の濱に立ち寄りアカモクを探してみたが，非常に少なく殆どがトゲモクであった。アカモクは激減している上に，神事用に取り尽くしたのかも知れない。また別の氏子の方に依れば，吸い物や味噌漬けにして食べるカヂメは，沖ノ島周辺のものは上物だが大島のものは苦味があって少し落ちるそうだ。持参した図鑑を示したところ，沖ノ島の海藻はカヂメで大島の海藻はアラメであった。地元の人は分類上の違いを味の違いで識別していた。因みに，沖ノ島のカヂメは今ではなくなってしまったそうだ。

3. 古式祭における「ゲバサモ」の意味

なぜアカモクが特別に扱われ，供えられるのかについて，楠本（2008）は以下の様に説明している。「祭の早朝，「ゲバサモ」が届けられ，神饌が整ってから祭が始まる。つまり，「ゲバサモ」がないと古式祭は出来ない。それは，海の霊力の象徴である海藻が刺激を与えなければ稲が実らないという信仰が根底にあった為ではないか。同様の例として，宇佐神宮の御田植え祭でも，斎田の中央に御幣と並べてワカメが吊るされる。対馬の赤米神事では，赤米俵に「ネズミ藻（ホンダワラ属のウミトラノオ）」をさしこみ海水を注ぎかけることによって，赤米の神が誕生するという伝承がある」（一部著者改）。

ホンダワラ類には米粒に似た気胞があって，五穀，特に稲の豊穣を祈って飾る習慣がある。しかし，ホンダワラ類は近年に至る迄，カリウムやミネラル肥料として特に重要で，与えると作物は格段に良く生育した。また，家畜の飼料としても利用された。海の神を祀る宗像大社の，五穀豊穣を感謝して祝う古式祭で「ゲバサモ」が祭壇中央に供えられ，御座で食べられるのは，「ゲバサモ」が五穀に生命を与え生長を促すとして尊ばれ神聖視されて来たからであろう。

アカモクを用いる古式祭は，上記の様に約800年の伝統を持つが，九州北部は古墳時代・弥生時代・縄文時代の遺跡も多い。3世紀末に成立した魏志倭人伝には，倭人の男は入れ墨をして海に潜って漁をする（石原 1985）ともある。胸に入れ墨をしたとされる胸形族とアカモクとの関係は稲作文化が伝わった弥生時代に迄さかのぼるのかも知れない。

「ゲバサモ」と言う方言は，日本海側の東北から中国地方で使われるホンダワラ類を意味する方言「ギバサ」と，朝鮮半島南西部で使われるホンダワラ類を意味する「mol」と同語源で長崎県の壱岐・対馬や福岡県西北部で使われる「モ」（濱田 2008b）との合成語と解釈出来る。宗像地方が，方言的に「ギバサ」圏と「モ」圏との境界なのかも知れない。

4. まとめ

福岡県北部の宗像大社は，海の神様である，天照大神の娘の三女神を祀り，古来漁労を生業とする宗像海人から信仰された。同社では，約800年の伝統を持つ古式祭が12月中旬に行われ，その年の収穫を感謝する。古式祭では早朝，御座と言って大勢で食事を共にするが，その際，「ゲバサモ」（ホンダワラ属のアカモク）が神饌として神に供えられ，御座の食事にも供される。海産の「ゲバサモ」が，五穀豊穣を祝う神事の中心に置かれるのは，気胞を持つホンダワラ類が稲穂に似ているだけでなく，古来，農作物の幼苗に海藻が生命を与え，生育を促す肥料として重要だった事を示しているのではないだろうか。宗像大社での「ゲバサモ」という呼称は，この地方がホンダワラの方言の「ギバサ」圏と「モ」圏の境界を示している様で興味深い。

謝辞

この研究を通じてお世話になった宗像大社関係者の方々と楠本正氏，ならびに原稿を読んで貴重な助言を下さった国立科学博物館の北山太樹博士に深く感謝します。

引用文献

濱田　仁 2007a. 出雲國十六島（うっぷるい）とウップルイノリ. 藻類 55: 121–122.
濱田　仁 2007b. 和布刈神事（めかりしんじ）. 藻類 55: 218–222.
濱田　仁 2008a. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社. 藻類 56: 35–38.
濱田　仁 2008b. 日韓共通の海藻名：モ（藻）とモル（mol），ソゾとソシル（sosil）について. 藻類 56: 83.
石原道博（編訳）1985. 新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝. 中国正史日本伝（1）pp. 45, 79–80, 108. 岩波文庫. 岩波書店.
倉野憲司（校注）1958. 古事記（712）. 太安万侶，稗田阿礼. 日本古典文学大系 pp. 76–79. 岩波書店.
楠本　正 2008. ふるさとの歴史④「ゲバサモ」のこと. つりかわ 11 月号.
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野　晋（校注）1967. 日本書紀（720）. 舎人親王撰. 日本古典文学大系. 上巻 pp. 107–110. 下巻 410. 岩波書店.
次田真幸（全訳注）1977. 古事記（712）上巻 pp. 80–86. 講談社学術文庫.

([1] 株式会社アイ・ディー・ディー，[2] 富山大学医学部保健医学教室)